



映像の記憶から 現在を考え 未来を見る



東京大学大学院情報学環
福武ホールB2F 東京大学本郷キャンパス
赤門並び



主催：東京大学大学院情報学環 東京藝術大学大学院映像研究科
共催：記録映画保存センター
後援：文部科学省21世紀COEプログラム
「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

シンポジウム

岩波映画の1億フレーム



戦後日本を代表する記録映画会社「岩波映画製作所」の作品群が、日立製作所等から東京大学・東京藝術大学に寄贈されることになりました。そのコレクションからいくつかの作品をダイジェスト上映しつつ、岩波映画の可能性と記録映画アーカイブの未来を探るシンポジウムを開催します。

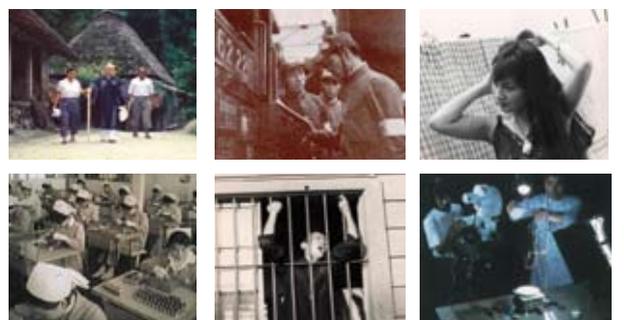
岩波映画製作所は1950年、岩波書店の後押しで科学映画の製作を開始しました。その後、戦後復興の柱となった電力、造船、製鉄、自動車など基幹産業を中心に、幅広く産業PR映画を製作しました。また「岩波映画学校」といわれるほど、実験的な作品や作り手を数多く輩出したことでも知られています。

岩波映画製作所が1950年から1998年までに製作した映画は約4000本、コマ数にして1億フレームにのぼります。それらは戦後日本の科学技術・社会・文化を記録した貴重な映像のデータベースです。それらの1コマ1コマをいま改めて詳細に見直すことで何が見えてくるのか。このシンポジウムでは、岩波映画の現代的意義や可能性について討論します。

また岩波映画のアーカイブ化は、散逸や消失の危機にある記録映画をいかに保存・活用していくかを考えるための、先駆的なモデルケースでもあります。岩波映画が東京大学・東京藝術大学に寄贈されるまでにどんな紆余曲折があったのか。その興味深い経緯を紹介しながら、映像アーカイブが直面する課題や未来について考えます。



2009年2月14日(土)
13:30~18:00 (開場13:00~)
入場無料・HPにて事前登録制
www.kirokueiga-archive.com



岩波映画の1億フレーム

主催者



吉見俊哉

東京大学大学院情報学環
学環長

専門は、社会学、文化研究。近代化の中のポピュラー文化と日常生活をテーマに、メディアと都市に焦点を当てた研究を展開。著書に「親米と反米—戦後日本の政治的無意識」(岩波書店)、「万博幻想—戦後政治の呪縛」(ちくま新書)、「都市のドラマチックルギー—東京・盛り場の社会史」(弘文堂) など多数。



藤幡正樹

東京藝術大学大学院
映像研究科長

80年代はコンピュータ・グラフィックのバイオニアとしてCGアニメーション作品を制作。その後コンピュータによる彫刻作品などインタラクティブな作品を発表。96年ネットワーク作品「GLOBAL INTERIOR PROJECT」でARTS ELECTRONICS グランプリを受賞

第I部：岩波映画の可能性を見る

岩波映画をいま改めて見直すことで何が見えてくるか。今後、岩波映画を用いてどのような研究や教育の可能性が見込まれるのか。実作者や映画史、戦後日本文化の研究者による討論(冒頭に岩波映画ダイジェスト上映あり)。

パネリスト



羽仁 進

映画監督

自由学園卒業後、共同通信社記者を経て、岩波映画製作所の設立メンバー。『教室の子供たち』(1955)、『絵を描く子どもたち』で、記録映画界に大きな影響を与えた。劇映画に転じ『不良少年』『フワナ・トシの歌』『初恋・地獄編』等を監督。国際的にも受賞多数。再びドキュメンタリーの世界に戻り、その集大成『動物に学ぶ—生きる』は大きな反響を呼んだ。



中村秀之

立教大学

立教大学現代心理学部映像身体学科教授。映像文化論。著書に『映像／言説の文化社会学』(岩波書店、2003年)、共編著に『映画の政治学』(青弓社、2003年)、『映像と身体』(せりか書房、2008年)、論文に『水俣—患者さんとその世界』論(『未来』2007年10~12月号)など。



鳥羽耕史

徳島大学

専門は戦後日本文化。『運動体・安部公房』(一葉社、2007年)で安部らの記録の運動を、「記録される現実をつくる記録—1950年代のダムとルポルタージュ」(『思想』980号、2005年12月)で岩波映画「佐久間ダム」を中心とするダムの記録の問題を扱う。生活記録からドキュメンタリーに至る当時の記録に関心を持つ。

コーディネーター



筒井武文

東京藝術大学

映画監督。東京藝術大学大学院映像研究科教授。映画作品に『ゆめこの大冒険』(1986)、『オーバードライブ』(2004)。共著書に『映画の授業 映画美学校の教室から』(青土社)。記録映画関係の論考に「時間のないドキュメンタリー フレデリック・ワイズマン論」(なみおか映画祭パンフレット1999年)、「土本典昭の編集術」(映画芸術425号2008年)など。

第II部：開かれたアーカイブに向けて

岩波映画はどのような経緯で大学に寄贈されることになったのか。その他の記録映画の保存環境は現在どのような状況にあるのか。今後それらをどのようにアーカイブしていくのか。開かれた映像アーカイブを実現するための課題を探る。

パネリスト



桂 英史

東京藝術大学

専門はコミュニケーション論／メディア論。データベースやアーカイブの構築を実践しながら、近代以降の社会思想とメディアテクノロジーが知のあり方に与えた影響を考察している。近年にあたっては、コミュニティにおける財と権力の再配分をテーマとして、国内外で、新しい公共文化施設のプランニングに携わっている。



とちぎあきら

東京国立近代美術館
フィルムセンター

日本で唯一の国立映画機関として、劇映画から記録映画、ニュース映画まで、日本映画を中心にあらゆるジャンルの映画フィルムと関連資料を網羅的に収集、保存している。現在の所蔵フィルムは約5万本。近年は映画のデジタル復元や国内外へのコレクションの貸与・巡回上映にも力を入れている。



藤岡朝子

山形国際ドキュメンタリー
映画祭 東京事務局

1989年より始まった映画祭では、参加映画のフィルムライブラリーを運営している。映画祭などで上映された日本語字幕入りの上映用フィルム・ビデオ200本強を収蔵し全国へ上映用に貸し出しや、映画祭に応募された世界中のビデオ7000本が館内閲覧できる施設を備える。

コーディネーター



丹羽美之

東京大学

専門は社会学／映像文化論。ドキュメンタリー映像を用いて社会研究や歴史研究に取り組んでいる。近年は、映像を用いてフィールドワークを行う、映像を利用して学ぶ、映像を収集してアーカイブを作るなど、映像に関する様々な研究的営みもっている可能性と方法論について総合的に考察・実践している。

スケジュール	
13:00	開場
13:30-13:40	開演・挨拶
13:40-15:40	第I部 (120分)
15:40-16:00	休憩 (20分)
16:00-17:30	第II部 (90分)
17:30	閉会・挨拶

2009年2月14日(土)

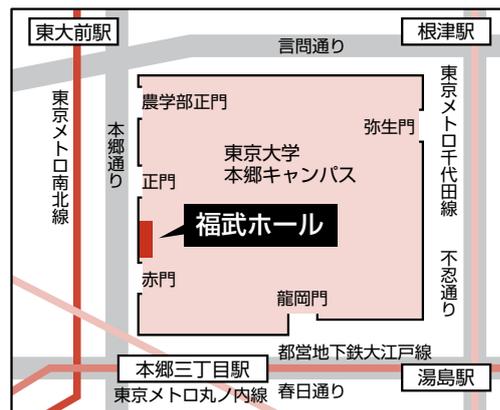
13:30~18:00 (開場13:00~)

東京大学大学院情報学環

福武ホールB2F 東京大学本郷キャンパス赤門並び

入場無料・HPにて事前登録制 定員:180名

www.kirokueiga-archive.com



最寄り駅からの所要時間

- 都営大江戸線 本郷三丁目駅 徒歩7分
- 東京メトロ丸ノ内線 本郷三丁目駅 徒歩8分
- 東京メトロ千代田線 湯島駅 徒歩20分
- 東京メトロ南北線 東大前駅 徒歩10分

お問い合わせ

記録映画保存センター

tel 03-3222-4249

mail archive-p@kirokueiga-hozon.jp